

経営情報学研究科を振り返って

吉 田 年 雄

平成8年4月に設置された大学院経営情報学研究科修士課程は、前年の6月に文部省に設置の申請をするため、その1年ほど前から、数人の教職員が協力して、色々な準備作業を行った。直面した問題の中で、スタッフは十分かということが最大の関心事であった。さらに、この研究科にどんな特長をもたせるかも問題となった。入学定員は15人となった。

スタッフについては、経営情報学研究科は、経営学と情報科学の複合領域であるため、研究指導教員（いわゆる^④）が、経営系で5人、情報系が4人の計9人必要ということであった。そのため、経営系では、通常の教員補充と合わせて、4人の教員を迎えた。情報系についても、通常の教員補充と合わせて、1人が採用になった。大学設置審議会の教員資格審査を慎重に検討したことにより、研究指導教授になりうる教員だけが、申請に加わった。その結果、全員が研究指導教授(11人)あるいは講義担当教授(6人)として判定され、一応、無事にスタートができることとなった。この修士課程設置の準備には、当時、経営情報学部長の高柳實教授の献身的なご骨折りを特筆すべきである。いろいろな苦労話があるが、それには触れない。

特長としては、昼夜開講と別地開講として、昼は春日井キャンパスで、夜は鶴舞の名古屋キャンパスで授業を行うこととし、社会人を積極的に受け入れることになった。

サテライトで授業を行うのは、名古屋では始

めてということもあり、初年度の入学希望者は、定員をオーバーする志願者が応募し、まずまずのスタートを果たすことができた。合格し、入学してきた大学院生は、半数が社会人であり、期待を上回ったことは喜ばしいことであった。その中で、情報系では、教員（短大、専門学校、高校）が3人、看護師（女性）が2人であったことが目立った。この頃の社会人学生は、向上意欲が高かったことを記憶している。

昼夜開講と別地開講の両方を満たす設置は、日本初ということで、開設前後には、いろいろな大手新聞社から取材を受け、紙面では、「駅前大学院」という見出しで扱われ、社会人教育の様子が伝えられた。NHKなどでも、授業風景や社会人へのインタビューが放映された。マスコミに採り上げられたことは、それなりの宣伝効果もあった。

授業は、ほとんどが鶴舞の名古屋キャンパスで、夜6時から9時10分まで、2コマ続きで行われた。午前または午後、春日井キャンパスで、学部の授業や卒業研究などの指導の後、鶴舞へ行き、夜の授業を行うのはかなり大変であった。また、研究指導は、土曜日に春日井キャンパスで行われた。常勤、非常勤を問わず、大学院担当教員の熱心な教育姿勢により、ここまで継続してこられたのは大いに評価すべきと思われる。

大学院経営情報学研究科長には、山田珠夫教授が就任し、経営情報学専攻主任には、6年間

の経営情報学科主任を終えてフリーになれると、ほっとしていた私がどういうわけか就任した。山田研究科長は、発足間もない頃、いろいろなルール作りに精を出された。

修士課程が開設されて、1年後には、博士後期課程の設置の計画が持上がり、その準備が始まった。博士後期課程開設時に退職する教員の補充という観点から、そのときも、スタッフをそろえる重要課題が出てきた。結局、1人の教員を補充した状態で、博士後期課程の設置申請に望んだ。昼夜開講、別地開講の他に、特長として、複数指導制、すなわち、経営系の院生に対しては、情報系の教員が補完的な指導を行い、逆に、情報系の院生に対しては、経営系の教員が補完教育を行うという制度を採用することにした。設置が認められ、平成10年4月に博士後期課程が入学定員3人でスタートした。修士課程は、博士課程の前期課程に組み入れられることになった。

入学志願者数は、平成8年度と平成9年度の修士課程の入試では、それぞれ、27人、18人であった。博士課程ができた平成10年度では29人、平成11年度は13人、平成12年度は22人、平成13年度は20人といった具合で、年により上下があった。合格者、入学者は、この6割程度で、入学生は、初年度を除いて、大学院生として必ずしも優秀で、ふさわしい能力をもった人ばかりではなかった。やる気を重視して、合格させた例もあった。よりよい入学生を確保するために、さらなる志願者の増加が望まれ、その中から優秀な人を選抜できることが期待された。博士後期課程では、入学者は、毎年、2人名程度であり、入学者の増加が望まれた。経営情報学部を卒業後、そのまま、大学院に進学する人は、工学部の場合と比べて、圧倒的に少ない。これは、経営情報学部では、大学院修

了後よりも学部卒業後の方が就職状況がよいことが考えられる。この傾向は、経営系において著しい。

経営情報学部における教育理念は、情報技術をもつ経営管理者、あるいは、経営の知識をもった情報処理技術者の養成であるということができる。経営学と情報科学の両方を勉強することになるが、本来、こういう複合領域では、両方ともかなり勉強しないとものにならない。経営学を経営学科にいる人の50%勉強し、情報科学を情報工学科にいる人の50%勉強しても、それぞれが、中途半端で役に立たない。バブルの時代には、人手不足（あるいは、将来の人材確保）により、そういうものも許された。私は、「適度な中途半端」という言葉を造語したが、それが意味をもつ時代でもあった。しかし、バブルがはじけ、より専門的な知識、能力が要求され、プロフェッショナル性が要求されるようになると、この中途半端は世の中から受け入れられなくなった感じが強くなった。経営情報学科がどのような方向性を求めていくのがよいかは現実の課題でもある。その点で、経営情報学科が経営学科と経営情報学科に分れたことは、プロ志向の時代の要請ともいえる。そのうちの経営情報学科が、教員の専門性を捨てずに、どのように特化していくかは難しい問題である。

大学院は、学部教育に対して、さらに専門性を増さなければならないが、経営学専攻、あるいは、情報工学専攻とどのような違いをもたせればよいかも難しい問題である。

経営情報学研究科に入学した学生は、概して、工学研究科の場合よりも、勉学、研究意欲が少なく、大学院へ来た動機に疑問を感じることもある。工学研究科では、ほぼ毎日研究室に来て勉学、研究を行うのが常識であるが、そうでは

ない学生が目立つ。また、学部で、いろいろ優遇されてきた（履修単位数の上限なし）外国人学生の授業を受ける態度に問題がある。例えば、ある非常勤教員の授業（受講生は外国人学生2人）に、平気で2人とも遅刻し、先生がそれらの院生が来るのを教室で待つといった失礼なこともあった。さらに、外国人学生のなかには、ろくに大学にも来ず、不勉強で、修士論文作成時に指導教授を大いに悩ませることもあった。それらの院生は、私の研究室所属ではなかったが、専攻主任として、呼んで厳重に注意した。そういう院生が目についたということであり、もちろん、一生懸命に勉学に励んだ院生も多数いたことも事実である。

前期課程の院生の指導が、自分の研究の多少の手助けになるとよいが、現状においては、そのように機能しているのは極めて少ないと言わざるをえない。もう少し、レベルの高い学生を指導できるようにならないと、大学院生と共同して研究するということは全く無理な話である。

工学部に移籍し、経営情報学研究科から離れようとしている筆者にとって、経営情報学研究科の研究指導教員の人数が大いに気になるところである。また、今後7年毎に行われる外部による大学、大学院評価も気になるところである。そういう意味では、現教員のさらなる研究業績の蓄積と研究指導教員の採用が期待される。

（教授 情報工学科 工学部）